

十四



勲七等志田梅太郎叙勲ノ件
右謹テ裁可ヲ仰ク

明治四十四年八月二日

内閣總理大臣公爵桂太郎



内

閣

賞勳局 第三三三號

徳田一三編

明治四十四年七月卅一日

内閣書記

内閣書記

内閣總理大臣

賞勳局總裁



勲七等志田梅太郎儀ハ明治四十一年四月臺灣總督府囑託ト爲リ屢々危険ヲ冒シテ蕃地其他ノ測量ニ従事シ功績尠カラス候處去ル五月一日ヨリ臺東廳下新武路溪附近ノ測量ヲ命セラレ同十二日中央山脈ノ内ラングスタウラ山上一萬一千二百二十尺ノ絶險ヲ攀攀キ露營スルコト二日ニシテ十四日測圖ヲ爲シツ、マテングル社ニ下ルノ途中標高七千餘尺ノ地點ニ於テ蕃人ノ狙撃ニ遭ヒ胸部ニ貫通銃創ヲ被リ生命危篤ニ迫リタル趣ヲ以テ臺灣總督ヨリ勲六等單光旭日章叙賜ノ稟申有之依テ審按スルニ本人ハ官吏ヲ以テ待ツヘキニ無之候得共前陳ノ如ク勲勞尠カラサル者ニ付此際特別ヲ以テ勲六等ニ叙シ瑞寶章ヲ授ケラレ可然ト存候此段允裁ヲ仰ク

内閣

電報譯

當府囑託月平當八拾円勲七等(瑞)志田
梅太郎四十二年四月以來蕃地測量事務
ニ從事シ數々蕃人ノ狙撃ヲ受ケル等常
ニ危険ヲ冒シ献身の職務ニ尽瘁シ理
蕃上ニ貢献スル所甚ク偉ナルモノアリ然
ルニ六月十四日台東廳トノ前進未到ノ地
ヲ実査中蕃人ノ襲撃ヲ受ケ頸部ニ貫
通銃創ヲ負ヒ危篤ニ付勲六(旭)ニ叙勲ノ
旨詮議ヲ仰ク内閣總理大臣ノ台湾總督
腹歴書ニ最近弘便ニ送ル

公 三五七

号外

臺灣總督府囑託志田梅太郎蕃地測量中
蕃人、襲撃ヲ受ケ危篤ノ趣ヲ以テ別紙ノ
通叙勅方電信ヲ以テ稟申ニ付至急御
詮議相成度書類及進達候也

明治四十四六月十八日

明治四十四年六月十九日

拓殖局總裁柴田家門

内閣總理大臣公爵桂太郎殿

拓殖局

地 三三回 房

五

明治四十四年七月二十日

拓殖局 七三二號

本年六月十八日付拓秘發第 七三二號ヲ
 以テ臺灣總督府囑託勲七等志田
 梅太郎叙勲ノ件意見ヲ付シ及進達
 置候ヘ共未タ何等御詮議不相成
 候處右ハ高等官ノ待遇ヲ為レタル者ニ
 ハ無之候ヘ共前上申中ニ有之候通本
 人ハ月手當八拾圓ヲ給セラレ殆ト判任
 官一等視スヘキ者ニレテ殊ニ別紙申出
 ノ通勲功有之者ニ付此際申請ノ通
 叙勲相成候様取扱ヲ為スハ是等
 従業者ノ志氣ヲ鼓吹シ今後ニ於ケ
 ル理蕃上ノ好果ヲ収ムルニ極メテ必要
 ノ義ト被存候條可然御配慮相
 煩シ度再應此般及上申候也

明治四十四年七月二十日

拓殖局總裁柴田家門



内閣總理大臣公爵桂太郎殿

囑託者田梅太郎叙勲ノ件ニ付テハ陸軍省ニ於
ケル蕃匪討伐事件ノ賞賜規程トノ關係有之ハ
為ノ大々勉勵ヲ示シテ異論アル趣ニ其處蕃社討伐
隘勇隊前進等ヲ起ケレトスルニハ先ツ目的地ノ
測圖ヲ為シ之ニ由リ計畫ヲ定メサルヘカラス故ニ
測量員ハ少数ニ整成員トシ共ニ勇敢ニシテ且ツ
機敏ナル行動ヲ以テ死地ニ出入シ作業ニ従事スハ
キモナルヲ以テ普通戦闘員ニ比シ一層ノ苦心經營
ヲ要シ其功果モ隨テ重大ナルハ勿論
ノ義ニ有之矣若由囑託ハ明治四十一年四月以降
蕃地測量事業ニ従事シ其作業日數七百餘
日測圖面積四百方里ヲ起工隘勇隊ノ前進蕃
社討伐其他ノ理蕃事業ニ貢獻スル所最多リ
今回負傷ノ際ノ如キ自己ノ身命ヲ顧ミスル
成原因ヲ保護セシメラ之ヲ全カラシメタル如キ
止メニ測量員ノミナラス一般ノ蕃務官吏ノ電
鑑トスルニ是ルモ有之候若シ叙勲恩賞其功
績ニ副フニ是ラサレハ日下現死地ニ入り作業ニ従
事シツ、アン幾多測量員ノ士氣ニ影響可致思
料セラレ其間此際特ニ出格ノ所詮議有之候標改
度且本人ハ危篤ノ状態ニ隔リ存リ矣付一般
行中ノ時期ニ延期シ難キヲ以テ可及的
盡力相成度別紙功績調書相添此致及依
頼也

明治四十四年七月十日

臺灣總督官房秘書課長

拓殖局總裁官房秘書課長宛

拓殖局

功績調書

臺灣總督府噶誌勲七等志田梅太郎

一、明治四十二年九月七日ヨリ今十六日マテ宜蘭深坑桃園三廳下ノ隘面力線外ニ出テ危險ヲ冒シテ視察シ測量ノ方針ヲ定メ今月二十三日ヨリ七月十四日マテ桃園廳下大山科山坎三角湧兩支廳管内ノ蕃地ヲ跋渉シ面積ニ十二方里ヲ測量ス

二、七月二十五日ヨリ十月二十九日マテ深坑廳下ノ線外蕃地ニ入り蕃人ノ耳目ヲ避ケ危難ヲ顧ミズ測量スルコト三十一方里此ノ間無人ノ窮山深谷ニ露宿スルコト二十日間、及トナリ

三、十月二十四日蕃藪著藜廳下ヨリ嘉義廳下ノ蕃地ニ向ヒ阿里山ヨリ新高山ニ登リ八通関ニ下リ更ニ路ヲ轉ヒテ中央山脉ヲ踰エ臺東廳下タルヌ社ニ出テターワン、エシロ、バチナル、マスボル、マーフマ等ノ各社ニ入り再び中央山脉ヲ横斷シ十月十四日蕃藪著藜ニ歸著ス此ノ地方タルヤ北部ニシテヤ一帯ヨリ太魯閣蕃地ト並稱セズ、絶險ナルカ爲テ殆ト人カラ以テ探險スヘカニナル暗黒地帯トシテ未ダ曾テ人跡ヲ印セザリシニ拘ラヌ一死ヲ堵シテ探險ヲ企テ一萬尺以上ノ地ニ露宿スルコト十餘日其間蕃人ニ往來セサル地域ニ入り懸崖ヨリ深湫ニ墜落シ僅カニ生ラ全クシタルコトアリバチナル、マスボル等ニ往テハ蕃人ノ要撃ヲ遭ヒシモ巧ニ之ヲ脱シ本身南部一帯ノ測地ニ関スル甚礎ヲ定メセブニ蕃人ノ分布及其蕃情ヲ精査言ニ重要ナル復命ヲナシタリ

四、十二月二十六日蕃薯着蔡廳下河里崗支廳管内ノ蕃丹
ニ入り測量ニ從事シ翌四十二年三月六日六龜里支廳管内
ノ蕃地ニ轉シ曾文溪楠梓仙溪荖溪流域並中央山
脈卑南主山ヨリ崗山ヲテ測量ヲ了ス九月十六日歸府ヨリ
此間遠征六十餘日通シ烈風猛雨ヲ冒シ困苦欽之耐ヘ
毎日未明ニ山巔ニ樵ヲテ測量ニ從事シタル途中蕃人出
草ノ警ヲ聞キ人夫逃走シ饑餓ニ瀕シタルモ之ヲ忍ビ麻拉
利匪熱病ニ罹リタモ之ヲ顧ミズ終ニ克ク其目的ヲ達ヤリ
測圖面積實ニ六十六方里一〇ナリトス

五、四十二年六月九日ヨリ八月十九日ヲテ宜蘭廳下ノ線外蕃地三十二
方里三〇ヲ測量ス

六、十月二十九日ヨリ十一月三十日ヲテ嘉義廳下ノ蕃地ヲ測量
ス此間無人ノ境ニ露營スルコト十餘日其面積四十三方里

二五ナリ

七、十二月一日嘉義廳下ヨリ阿緹廳下ノ未歸嶼蕃地ニ入り
中央山脈ヲ横断シ人跡未踏ノ險地ヲ測圖シ十八日下三
社ニ出テ同二十七日歸府ス其測圖面積三十一方里餘

八、四十二年一月二十日南投廳下ヘ出張ナマカパン社ヲ經テ阿里
山北部ヨリ陳有蘭溪ノ流域ヲ測量シ更ニ八通崗ヨリ
中央山脈大水窟ニ出テ秀姑巒山ヨリ南ニ中央山脈ヲ跨
ハテ十數里間無人ノ境ヲ測圖シ臺東廳下埤石閣溪管
内ココス社_下入りターワン社タルナス社ヲ經テ三月十二日ナ
カパン社ニ出テ同二十八日歸府ス測量面積三十六方里九
日ナリ此間天候不良ニシテ烈風霰ヲ捲キ寒威凜烈
ナル爲メ荷物ヲ負ハシタル蕃人逃走シ終日一勺ノ水ヲ得
ズ一萬千余尺ノ山頭ニ食メ眠ラス夜ヲ徹セシコトアリ

又ウーサイコ社ノ蕃丁職首ヲ企テ歸路ヲ抗シ粗野ナル邊
ビシモ巧ミ之ヲ避ケ得タリ其他道路ノ險難食物ノ缺乏
等ハ殆ト枚擧ギニ遑アラズ

九、四月九日臺東廳下ニ出張シ大麻里溪ヲ溯リ同流域及知
本溪流域ヲ測量シ五月三十日歸府ス此出張中跋渉セシ
蕃地ハ蕃人モ未タ曾テ經過セサル險惡ノ境域ニシテ山嶺
ニ露宿セシト屢ナリ測圖面積三十三方里六〇

十、九月十日花蓮港廳下璞石閣支廳管内ニ出張秀姑
驛溪斃々溪清水溪ノ各流域ヲ測量ス此間天候不良
ニシテ健康ヲ害シタルモ前後五十餘日蕃屋内ノ石般石上ニ
起卧シ日日瘴癘ヲ月日面積五十一方里〇八ノ測圖ヲ了セリ

十一、十二月七日璞石閣ヲ發シ臺東廳下ニ轉シ大南社ヨリ中央
山脉ニ攀テ險難ノ地域四方里八〇ノ測圖ヲ爲シ同月十一
日歸府ス

十二、四十四年二月七日阿緬廳下ニ出張恒春蚊蟀両支廳管
内ヲ跋渉シ面積十五方里六四ノ測圖ヲ終リ三月九日歸
府ス此出張中ハ天候噴和蕃情又平穩ニシテ健康
上ニ注意スレハ別ノ何等ノ苦痛ヲ感セザリシ

十三、四月二日臺東廳下ニ出張蕃地測量ニ從事シ全十五
日轉シ花蓮港廳下ニ至リ太魯閣探險ノ爲メ入蕃
セントシタルニ蕃情險惡不測ノ變アルヲ慮リ各方面ノ山上ニ
上リ目測圖ヲ製スリ五月一日ヨリ雨止臺東廳下新
社路溪附近ノ測量ヲ命セラレ全十二日中央山脉ノ内ナルヲ

ンダスタウラ山上ニ萬一千百ニ尺ノ絶險ヲ攀テ露宿
スルコトニ日十四日尙測圖ヲ爲シツクマテングル社ニ下ル途中
標高七千餘尺ノ地點ニ至リシトキ蕃人ノ粗野ニ適ヒ胸

部ニ貫通銃剣ヲ被リ逐々危篤ニ陥リタリ然レモ既成
測量原圖ニ至リ測量日誌ヲ保護ハ他人ニ托シ之ヲ全ウス
ルヲ得タリ

拓 殖 局